

平成 25 年度学校自主研修事業（特色ある学校づくり）【先進校視察報告】

訪問者：宮城県角田高等学校 教諭 菊地
教諭 小元

《視察校（Ⅰ）について》

1. 訪問先及び訪問日について

訪問先：山形県立鶴岡南高等学校

訪問日：平成 25 年 9 月 19 日(木)



2. 学校概要

創立 125 年を迎える伝統校で、山形県を代表する進学校である。学年の 8 割近くが国公立に進学し、地元だけではなく全国の難関大学に進んでいる。平成 16 年度より、理数科と普通科を区別しないで募集する選抜方式を採用し、2 年次から理数科 1 クラス、普通科理系 2 クラス、普通科文系 2 クラスに分かれている。また、平成 24 年度から文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受け、科学技術の発展を担う高い志を持った「人材」の育成を目指し、特徴ある取り組みを実践している。

鶴岡市内の中学生トップ 200 は鶴岡南高校を目指すといった雰囲気確立しており、全員がセンター試験を受験する覚悟で入学してきている。

3. 過去 3 年間の進路実績(現役生)

年度別 内訳 校種別	平成 25 年度		平成 24 年度		平成 23 年度	
	受験者数	合格者数	受験者数	合格者数	受験者数	合格者数
国公立大学	229	143	276	119	237	118
私立大学	232	134	420	217	347	172
短期大学	8	4	7	6	6	6
専修・各種学校	18	15	7	5	5	2
準大学・他	7	4	5	2	5	2
総計	494	300	715	349	600	300

4. 主な進路先 (H25)

新潟大(25)、山形大(19)、秋田大(9)、東北大(7)、宮城教育大(5)、弘前大(5)、岩手大(2)、福島大(4)
埼玉大(8)、富山大(6)、京都大(3)、東京学芸大(3)、千葉大(2) 他

5. 視察内容の報告

(ア) SSH (Super Science High school) の取り組みに見る進学指導

(1) 主体性・探究心のある生徒の育成

「探究的な学び」が学びの本質であるといった考えが根底にあり、発見や疑問を一つ一つ自分で調べて、確かめて知っていくことをねらいとしている。総合的な学習の時間と SSH の取り組みをうまく融合させ、2 年目の実践となる。「鶴南ゼミ」と称し、生徒が興味関心のあるテーマを選び、大学のゼミのように研究・実験等を行い、最終的には研究した内容をプレゼンテーションする。山形大学や東北大学、また地元にある先端生命科学研究所などの研究室を訪問し、教授と実際に話し合いを重ねながら研究を進めている。1 年次から 3 年次まで体系的にプログラムされており、情報活用能力やコミュニケーション能力が培われている。また、生徒各人が興味を持っている分野や、将来進みたい学部や学科の選択にも直結している。

(2) 国際交流事業の推進

今年度より、2 年生が台湾への海外進路研修を実施し、台北市立建国高級中学との交流を行う。単なる学校訪問ではなく、SSH を通して研究した内容を台湾で発表するといった内容である。グローバルな視野で主体的に課題を解決する能力を持つ「人材」の育成を目的としている。目的や狙いがはっきりした中で、組織的に教員や生徒が評価や検証を行い、計画的に準備が進められている。

(3) 理数系科目に力を入れた取り組み

1 年次は全員同じ教育課程で学び、2 年次より理数科 1 クラス、普通科理系 2 クラス、普通科文系 2 クラスに分かれて学習する。「SS 数学」「SS 物理」「SS 化学」「SS 生物」「SS 地学」といった学校独自科目を設定し、理数教育を充実させている。理数セミナーを実施し、被災地研修・東北大学訪問・東京大学キャンパスツアー・筑波宇宙センター(JAXA)訪問等を行い、最先端の研究施設で実習や講義を受けている。理数系才能の伸長と視野の拡大を目指し、生徒たちは意欲的に参加している様子で、理系大学への進学率も高い。

(イ) 学力層別指導の工夫と学習法について

入学以来、国公立大学への進学を希望する生徒が 9 割以上であるため、医学部を含む難関大・一般国公立大・難関私立大といった生徒の希望別に講習等を行っている。また、山形県の進学推進校 9 校に入っており、難関大セミナーや難関大模試等に挑戦させ、進学意欲を高めている。県が主催する企画をうまく活用している様子であった。

鶴岡南高校の授業は 1 コマ 55 分で 6 時間の日が週に 3 日、7 時間の日が週に 2 日ある。5 時間目と 6 時間目の間に清掃を入れるなど、生徒が授業に集中しやすい環境づくりにも配慮している。5 分間で演習するなど中身の濃い授業を実践しており、効果的な復習の時間に充てている教科もあるようだ。特別な講習や演習を行っているというわけではなく、授業を第一と考えその実践内容の充実を図っている。

(ウ) 文武両道が基本

運動部・文化部ともに活発な活動がみられる。部活動に熱中しながらも、学習時間の確保ができていたようであった。学校行事へも意欲的に参加する生徒も多く、学校全体に活気があるように思われた。進路目標を高く設定している生徒が多いため、主体性のある生徒が育っていることを実感した。

《視察校（Ⅱ）について》

1. 訪問先及び訪問日について

訪問先：山形県立酒田東高等学校

訪問日：平成 25 年 9 月 20 日(金)



2. 学校概要

創立 93 年を迎える進学校である。創設以来、「文武両道」「質実剛健」を校訓とし、「知・情・意・力」を教育目標としている。平成 24 年 4 月に酒田市内にある 4 つの高校（酒田商業・酒田工業・酒田北・酒田中央）が統合した。毎年国公立大合格者 100 名以上の数値を上げ、地域の進学校としての役割を果たしている。

3. 過去 3 年間の進路実績(現役生)

卒業年	平成 25 年度			平成 24 年度			平成 23 年度		
	延合格	実人数	進学	延合格	実人数	進学	延合格	実人数	進学
国公立大学	119	119	109	131	130	134	134	132	120
私立大学	154	89	57	201	98	54	187	-	58
国公立短大	1	1	0	3	3	3	2	2	2
私立短大	2	2	2	2	1	0	1	1	1
専修・各種	12	8	4	0	0	0	4	4	4

4. 主な進路先 (H25)

新潟大(18)、山形大(14)、秋田大(10)、東北大(9)、茨城大(5)、福島大(4)、東京大(2)
青山学院大(4)、明治(3)、法政大(2) 他

5. 視察内容の報告

(ア)2004 年度からの「進学指導体制作り」

学習時間の低下や進路実績の低迷(特に国公立大学合格者の減少)、定員割れ等の問題に対応するため、新体制作りを踏み出した。また、「前例踏襲」への危機感とともに、変化する生徒への対応が課題となっていた。長崎県、静岡県、富山県等の進学校視察を実施し、進学指導の見直しを図った。進路部長が中心となり、進路部、教務部、生徒部からそれぞれ各 1 人、計 4 人のスタッフで本プロジェクトを立ち上げた。

(1) 徹底した生活指導

2004 年度入学生から学校を変えるため、制服の着こなしをはじめとする容儀指導に力を入れた。現在でも月に 1 回全校で容儀指導を行っている。また、入学式の次の日から宿泊研修を実施し、学習指導、生活指導、学年としての集団作りを徹底している。

生活と学習の記録「Do Practice」を使用し、生徒各人の生活習慣や学習習慣の見直しを意識付けしている。点検・反省・改善のサイクルを確立して効果的な活用を実践しており、進路相談や悩み相談など、担任との誌面上の面談といった要素も強い。春季休業・夏季休業・年末年始の休み中などは原則として部活動顧問が点検をしたり、月に一度は担任外点検を行うなど、その利用法に工夫がみられる。その効果があって、生徒に落ち着きが見られ、平成 21, 22 年度の生徒指導件数はゼロであった。

(2) 学習・進路指導

「学習の量は質に転化する」を合言葉に、国・数・英で最低 6 時間の週末課題を与えている。提出に関しては厳しい姿勢で臨み、部活動の制限などを与えながら進めている。課題の未提出者を部活動ごとに公表し、見逃さない指導を徹底している。

進路指導においては、「高い進路目標設定と維持」させることを念頭に置きながら、3つの段階（層分け）をして次の通り実践している。



(a) 学年をリードする集団作り『ヒマラヤプロジェクト』

共通した週末課題のほか、難関大希望者へは特別な課題を提供し、添削指導を実践している。また、東大、京大、医学部大ガイダンスや東大 OB との懇談会を開き、志望校に立ち向かう意識作りを行っている。

(b) 厚みのある中間層形成へ『サクセスプロジェクト』

地方国公立大挑戦層を作り、学力のレベルアップを意識させている。国・数・英のバランスを保たせる課題を与えるなど、長期的に力をつけさせるよう工夫している。この層に対しても進路ガイダンスを行い、常に国公立を意識させている。

(c) 学習結果が低迷する層への手立て『リカバリープロジェクト』

定期考査での「赤点者ゼロ」に向けての取り組みからスタートし、年末特別学習会や正月特別学習会等を実施している。その他にも「レベルアップ学習合宿 2泊3日」といった取り組みをし、地方国公立大を諦めさせないための方策も実践している。

(イ) 環日本海沿岸進学ネットワーク事業

「山形の未来をリードする人材育成事業 (H24~28)」を通して進学重点校に指定され、生徒の学力向上はもちろんのこと、教員の研修の充実を図っている。

当該事業も 3 回目を迎え、全国各地で進学ネットワークを結んでいる。日本を担う人材の育成を目指し、教員が学校や県の枠を超えて切磋琢磨し、情報交換を活発に行うことで、参加教員及び参加高校の指導力向上と教育実践の活性化を図ることを目的として行われている。現在もなお、様々な交流活動を通してこの事業は活発化しており、環日本海のみならず他県からも参加しネットワークが広がりつつある。大学関係者を講師として迎え、人材育成について活発な議論が交わされている。

(主な参加校)

秋田南、能代、横手、高田、長岡、気仙沼、古川、会津、茅ヶ崎西浜、岐阜北
石動、呉羽、魚津、山形県内の進学推進校 9 校 ほか (全 25 校)

《視察校（Ⅲ）について》

1. 訪問先及び訪問日について

訪問先：山形県立新庄北高等学校

訪問日：平成 25 年 9 月 20 日(金)



2. 学校概要

創立以来、県内屈指の進学校としての歴史を刻み、一貫してリーダー育成を使命として歩んでいる。

平成 26 年度から「進学型単位制高校」として新たな歩みを始め、少人数指導や習熟度別授業によるきめ細やかな学習指導を計画している。また、最上校との「キャンパス制」もスタートし、生徒会活動・部活動・ボランティア活動等で交流を深め、活発で質の高い活動を目指している。

3. 過去 3 年間の進路実績(現役生延べ人数)

卒業年	平成 25 年	平成 24 年	平成 23 年
国公立大学	66	73	64
公立大学	20	15	27
私立大学	153	130	149
公立短大	11	12	4
私立短大	3	3	1
専門学校	16	34	16

4. 主な進路先 (H25)

山形大(21)、新潟大(8)、福島大(7)、宮城教育大(5)、茨城大(4)、弘前大(4)、埼玉大(4)
釧路公立(3)、宮城大(3)、山形県立保健医療大(3)、東北学院大(15)、東北福祉大(6) 他

5. 視察内容の報告

(ア) 高大連携の取り組み

「大学研究室訪問プロジェクト」は新庄北高校のキャリア教育における中心的な取り組みである。平成 15 年度からスタートし、現在は「特色ある高校づくり事業」における 2 学年の取り組みとして位置づけられている。春先に総合的な学習の時間を利用して 2 年生全員が「課題研究」に取り組み、自分が興味や関心を持った内容について調べたことを発表する。その中から選抜された生徒が、夏休み中に山形大学や山形県立保健医療大学の研究室を訪問し、教授より指導を受けて研究内容を深化させている。10 月には「研究室訪問成果発表会」を実施し、研究成果をほかの生徒にも還元している。4 年前からは「ポスターセッション」形式での発表とし、1, 2 年生全員に参観させることによって、大学での学びに対する意欲

を高めるように努めている。プレゼン力や表現力・コミュニケーション能力も同時に培われているようである。

<生徒の主な研究テーマ>

分野	研究テーマ	分野	研究テーマ
人文社会	睡眠・夢～心身への影響～ メディアの姿とあるべき姿	法律政経	ディズニーの経済効果 日本の近隣諸国と外交問題と日本 の内政について
教育・スポーツ	記憶と勉強～一夜漬け～ コーチングとティーチング	理学工学	タイムトラベルはできるのか 地球に隕石が落ちた時の影響
農業・生物	脳と心霊現象 顔を認識する脳の仕組み	医療福祉	笑いの効果 未来の医療について

(イ)「人材バンク」を進路指導に

毎年卒業生を「人材バンク」として登録し、連絡が取りやすい環境作りをしている。長期休業中の学習合宿や受験期には現役大学生と話し合いの場を設けるなど、受験生への励ましの機会となっている。

2年次の9月には、学部系統別に大学生をパネリストとして迎えて「学部・学科ガイダンス」を実施している。大学生とのパネルディスカッション形式を通して、大学生活の様子や学んでいる内容を知ることができ、卒業後の進路、受験勉強の具体的な方策などの話を聞くことにより進学意識を高めて、学部学科に対する理解を深めている。

(ウ)キャリア教育として

1年次6月より、総合的な学習の時間で「社会研究」をテーマにキャリア教育を実施している。「社会に目を向けよう」と題して、新聞を通して社会に目を向けさせ、興味のある分野に対して考察を深める取り組みをしている（新聞活用術→興味分野の調べ学習→調べ学習発表会）。

さらに10月には、「郷土の企業を知ろう」というテーマを掲げ、地元企業の訪問を行っている。今年度は9コース18社を予定し実施することとなっており、企業や施設の訪問先の決定には多様な業種から選定し、生徒の興味・関心に応じて決定している（事前学習→企業見学→まとめレポート作成→成果発表会）。

以上の2つの取り組みは、学部学科選びや大学選び（文理選択）、さらには小論文指導にもつながっている。また、生徒たちは自ら考え課題等を見出し、調べ学習から考察・発表までをやり遂げているため、主体性のある生徒に成長することができている様子であった。

(エ)アップグレード・ガイダンス

4月と9月にスタディーサポートを実施している。学力や学習に対する意識の変化を入学当初の結果と比較し分析することで、夏休みまでの指導の結果を検証しながら指導の修正を図っている。1学期間の学習の成果を紹介したり、生活のリズムや学習法を整えることを目的とした集会である「アップグレード・ガイダンス（中間初期指導）」を1・2学年で行っている。教員側も授業の進め方や課題の与え方を再考している。

《視察校による本校への提言》

今回の3校の学校を視察してきたが、どの高校も地域の進学校としての役割を担っていた。大学へ進学するために鶴南・酒東・新庄北を選ぶといった地域性がうかがえ、それぞれの高校では教員も自信をもって進学指導にあたっているようにさえ感じた。

どの学校にも共通していえることは、学習指導、進路指導において「仕掛け」と「狙い」が明確であるということだ。 当たり前のことかもしれないが、文理選択や志望学部・学科選択のために進路講話を実施したり、適切な学力層別の指導を行ったりするなど、1年間または3年間を見通した取り組みが絶妙なタイミングで実践され、目的意識が明確であった。

本校での取り組みと根本の部分では重なっていると言えるものも多々あった。一つ一つの取り組みについて、これまでの取り組みの良さを生かしつつ、本当に必要な取り組みは何かを精選しつつ、新しい「角田高校らしさ」といった独自性を生み出していく必要性を強く感じた。そこで考えた提言・提案は次のようなものである。

提言1：行事・講話等の学校行事の精選と授業時間の確保

今回視察した学校全てにおいて、特別に課外や講習を行っている取り組みは見られなかった。朝のゼロ時間学習も実施しておらず、1・2年生においては長期休業を利用した短期課外、3年生においてはそれに加え6月より平常講習を行うなど、本校との違いは感じられなかった。しかし、授業時間の確保は徹底されており、55分授業の中の最後の5分で演習問題に取り組んだり、生徒がリフレッシュして授業に臨むことができるように、5時間目と6時間目の間に清掃活動をさせるなどの工夫が見られ、授業そのものの重要性を感じながら中身の濃い授業を実践している。

本校においては、講演会や学校行事等で授業がカットされる場面も多々ある。1年間を見通して講話等が組み込まれていれば問題は解消されるであろうが、年度初めに出されるカット表から大きく外れる傾向にもある。また、講演自体の回数も年間を通じ多すぎるようにさえ感じる。「前年度踏襲的傾向」が強く、それに加え新たな取り組みも増えていき、「狙い(目的)」や「落とし所(成果)」が見えなくなっているのではないだろうか。

【提案】

- ① 学校作りの「核」になる組織の発足
 - ・学校行事や講演会・進路実現へ向けての取り組みを精選(見直し) 【「回数」ではなく「質」】
 - ・総合学習の使い方【目的の明確化と成果の検証】

- ② 全体の行事をスリム化し、学年色(学年独自の取り組み)を活かす
 - ・各学年のコンディションに応じた生徒対応

提言2：主体性のある生徒の育成

視察した3校の共通点の一つとして、「生徒に主体性を持たせるような活動を実践していること」があげられる。各校では課題研究や大学の研究室訪問など、自らが考え行動におこすような活動をさせている。さらに、その成果を発表するなど、生徒間での振り返りもさせている。計画・実践・成果の流れがはっきりしていた。

本校の場合、そのような場面はほとんどないように思われる。生徒に与えるものが多く、生徒自身が主体的に活動する場面があまり見られない。人前で何かを発表したり、自分で考えて行動するといった活動の部分が欠けているのではないか。総合的な学習の時間等を活用してアウトプットする場面を作っていないと感じる。

【提案】

① インプットからアウトプット（生徒が活動・活躍する場面作り）へ

生徒を主体的に動かすためには、生徒が生徒の前で発表するといった場面を作ることも必要であろう。オープンキャンパス訪問や企業訪問などを実施しているが、レポート等を提出させて終わりではなく、それをアウトプットさせる場を意図的に作り、成果を共有させるべきではないだろうか。このことを実践することにより、最終的には学部・学科の選択や文理選択、生徒各人の進路選択につながるはずである。しかし、アウトプットができていないために、進路希望調査の結果によると、大学進学は希望しているが具体的な大学名、学部・学科名等が未定の者が半数を超えている(1 学年)状況である。活動が単なる活動ではなく、その「落とし所 (=目的)」を明確にするべきである。

② 授業作りに工夫を

授業が学習・生徒・進路指導の中心であるという心構えを持つことが必要である。授業の展開を工夫し、生徒が活動して発表するといった場を提供していかなくてはならないと感じる。

提言 3：学力に応じた層作り・進路希望別の層作りの充実

視察した3校の生徒たちは、ほぼ全員がセンター試験を受験するため進学意識が強い。そのため、学力層に分けて学習指導を行うというよりはむしろ、希望大学のレベルに応じた学習指導がなされている。課題の与え方にも工夫が見られ、山形県が主催する「難関大セミナー」などもうまく活用している。

本校では正しい「層別指導」がなされているだろうか。英語・数学における習熟度別学習や進路別ガイダンスなど、うまく機能しているのかどうかを検証・改善していかなくてはならないと感じる。

【提案】

① 習熟度別学習の内容を検討・実践する

習熟度別学習が単なる少人数制の授業になってはならない。授業の進度や内容が計画的に検討されているのだろうか。各教科・科目での指導方針や目的等を明確にして、生徒が授業内容に対して、良い意味で「差」を感じ、実践力が養えるような、言わば $+\alpha$ の内容を提供していくべきだと考える。

② 進路別ガイダンスの充実

進路別のガイダンスを好機ととらえ、計画性を持たせた内容を実践したいところである。大学出張講義など学校独自の素晴らしい行事があるが、その一つ一つが生徒各人の進路希望と合致しているか、また、講義の希望をとるまでにどのような情報を与えられたかなど、計画的かつ詳細に検討すべきであろう。1月に第3回目の進路希望調査があるが、その時までにどのような働きかけをしていくかが課題となる。現時点での志望学部・学科や志望校の未決定者の数の多さ(1 学年)に見えるように、機械的に調査をするのではなく、生徒各人の人生選択に関わっている意味を深く考えさせたい。